

# 特集 卒業生から…

特集—卒業生から… ①

## 人生は「ときめき」とともに

(高校二十二回卒) 西尾章治郎

日本経済新聞の平成二十二年一月二十八日付朝刊の「交遊抄」に、次のような私の記事が掲載されています。

### スキーの恩師

中学校の同窓会に出席し、大学教授をしていると言うと驚かれる。同級生たちは私がスポーツ選手になると思っていたらしい。小中学生時代、岐阜県国府町(現高山市)で二人の恩師のもとアルペンスキーに熱中していたからだ。

小学校時の先輩良一先生は、町のスキー大会で常に優勝していた私を飛騨地区の様々な競技会に連れ出した。大半がアイスバーン状態の急斜面コースで怖かったが、コース脇から温かく見守る先生の姿を見ると恐怖心が吹っ切れ、何があるうともゴールまで到達しようとする

科学研究科の教授として、教育・研究に携わっております。丁度、還暦を迎えました昨秋、「情報科学に関する研究によく努めて優れた業績を挙げ学術の進歩に寄与した」という貢献により、はからずも紫綬褒章授受の榮譽に浴することができました。

このように今まで三十年間以上にわたって研究生活を続けてきましたが、その継続することの力の源泉は何であったのかを振り返って、皆様にお伝えしたいことは、「ときめき」を感じることの重要性です。学問や研究は、集中しないとできません。おもしろくて、心がワクワクする「ときめき」を感じていないと、寝食を忘れるほど集中し続けることはできないものです。

私は大学院生のころ、ご指導いただいた先生の首を縦に振らせることを目指しておりました。

当時、工学分野でも数学や物理に近い数理工学を専攻しておりましたが、取り組んでいる課題の解が得られなかった先生の前で板書をしながら説明していくと、たいてい途中で不備な点や間違いを指摘されてしまいます。

そこで、先生が納得されて首を縦に振ってください



気がわいた。

中学校時の草壁功先生との出会いで、私の競技熱はさらに高まった。中学二年に県大会で優勝したが、翌年は大スランプに。そんな時、先生の「精進しておれば、いつか天はほほ笑む」という励ましに心に染み。競技からは離れたが、当時の喜び、辛さ、栄光、挫折などがその後の人生の道標となっている。(中略)

さらに精進を重ねて西先生に恩返しをしたいと心から念じている。

この記事のように、小中学校時代は雪が積もれば、週末の放課後、週末は全日、ほぼ一日も休まずスキー三昧でした。当時、何故あれ程までにスキーに、さらに冬季以外は野球をはじめ他のスポーツに熱中できたのかを今になってしばしば自問することがあります。それは、練習を重ねてひとつひとつ次のステップに進むことの嬉しさ、心弾む「ときめき」感が、練習の辛さに勝っていたからだと思います。

さて、斐太高等学校を卒業して以降の自身の道程を振り返りますと、まず、京都で十九年間過ごしました。京都大学に入学し、卒業後さらに大学院に進み、工学博士の学位を得て京都大学に教員として就職しました。その後、大阪大学に移り、特に昨年の八月までの四年間は大学の理事・副学長として大学の運営にも携わりました。現在は、情報

瞬間のために、寝る間も惜しんで研究を続けていました。それは、このような瞬間を迎えることに「ときめき」を感じていたからできたのだと思います。

「ときめき」には、ワクワクするおもしろさとともに、「あこがれ」を感じる意味もあります。フランスの著名な哲学者のベルクソンは、道徳や倫理の基礎にあるのは、「あこがれ」の気持ちだと言っています。これを感じないといけない、してはいけないと感じるのは、立派な人に触れて、あこがれ、自分もあんな人になりたいという気持ちが起きたときだと。

皆さんが、これからの人生においてさらにいろいろなことを学ばれ、成長されていく過程において、今まで自分が想像もしなかった問いに触れる、そういう問いを立てて夢中になって格闘している人に触れる、そこにはおもしろさとあこがれという二重の喜びがあると思います。皆さんが「ときめき」を感じる心を常に研ぎ澄まされ、今後の人生を豊かで実りあるものにされることを心より祈念いたしております。

国立大学法人 大阪大学大学院情報科学研究科 教授  
二〇七〇・二〇一一年 国立大学法人 大阪大学 理事・副学長  
二〇一一年 紫綬褒章受章